公益の風 #37

東北公益文科大学　准教授
加藤良浩

「愛」の心で意識の高みへ

これまで私は英米の文学作品を研究の対象としてきた。その中でも、特に興味を持って取り組んできたのは、1920年代以降にアメリカ南部の地域で起こった「南部ルネサンス」と呼ばれる文芸復興の時代に属する小説である。

「南部ルネサンス」の小説を語る際に忘れてはならないのは、南部の産業に壊滅的な被害をもたらした南北戦争である。その戦争において、戦闘のほとんどは南部領地で行われた。このため、南部では道路、鉄道、橋梁等の重要な社会基盤が破壊され、農地は荒地と化したが、北軍のシャーマン将軍による徹底した焦土作戦がそれに追い打ちをかけ、南部の人々が持っていたほとんどと言ってよいほど多くの所有財産は消失し、産業そのものも壊滅状態に陥ってしまった。

こうして甚大な被害がもたらされ、後世にも大きな痕跡を残したことからも、戦争は南部ルネサンスの作家たちにも大きな影響を及ぼしたと考えられる。彼らは戦争で物を失った喪失感を肌で感じたにちがいない。しかしそのとき、彼らの心には、物の二項対立的存在とも言うべき精神が価値ある存在として浮かび上がってきたのではないか。そして、結果的にはそのことが、南部という枠組みを越えたテーマを描くことに関心を向ける要因となったのではないか。

ジョージア州サバナに生まれたフラナリー・オコナーは、南部ルネサンスの代表的作家の一人だが、晩年の代表作「高く昇って一点へ」には、精神の存在に重きを置く作者の姿勢が色濃く表れていると言えよう。この作品は、カトリック司祭かつ古生物学者、地質学者であり、北京原人の発見者としても知られる、テイヤール・ド・シャルダンの著作『現象としての人間』にオコナーが感銘を受け、その理念と公民権運動が高まっていた南部の現実との融合を試みたものである。

テイヤールによれば、地球上の生命が持続するためには形態変換に迫られたと同様に、ひとたび思考（内省）力を備えるまでに発達した人間は、意識の上昇(自己の鍛錬、発見）という深層における形質転換の持続なくしては存続しえない。また人間は、他のすべての生物や文明の形成過程において見られたように、能力を完成し発揮していくためには集団をなす必要があるが、その集団での意識の上昇によって、死のエントロピーからも免れた人間は（ただし肉体は免れることはできない）求心的旋回運動を通して、至上の意識の高み、すなわち至高の平和と救済の究極としてのオメガ点に達することができる。

ただし、この場合条件がある。生命そのものが構成要素の無限の多様性を通じてしか確立されない以上、その集団は共通の性質を持つ個で構成されていてはならない、つまりは接点を持たない異質な性質の個と個が存在そのままに結びついたものでなければならない、ということである。それでは、そうした不可能にすら思える結合を可能にするのは何か？それはまさに、自己よりも他を優先するとの意味において公益の概念と通底する愛の力である。この力こそが存在の本質を捉え、個と個を結びつけるのである。

公民権運動において人々は、キング牧師の「汝の敵を愛せよ」という理念のもと非暴力を貫いて権利を勝ち取った。オコナーが『現象としての人間』における理念と南部の現実との融合を試みたのも、この現実の愛の力を感じた彼女が、それを『現象としての人間』の中で述べられる神秘的な力を持つ愛の力と重ねようとしたからにちがいない。

シャーマン将軍による焦土作戦「海への進軍」

荘内日報社「敬天愛人」2024年8月号(Vol.185)掲載